

【文献紹介】

Tomas H. Kaiser
Zwischen Philosophie und Spiritismus
Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel

熊谷哲哉

はじめに

およそ 100 年前、人々は何を考えていたのだろうか。今日の私たちが生きている世界を決定づけるような様々な技術—鉄道・電話・映画など—が登場した時代に、ひとびとの関心を引きつけてやまなかったのは、幽霊との交信や死後の魂の生存可能性やテレパシーによる通信といった、いわゆるオカルト現象であった。カール・デュ・プレルという人物は、もともと哲学者を志していたのだが、のちに催眠状態の人間のなかで、死後の人間と話したりする特別な能力の萌芽を見いだしたり、宇宙空間こそが、死後の人間の生き続ける場であると述べたり、その独自の世界観を雑誌や講演を通じて、広く世の中に普及したりと、この時代に、縦横無尽の活躍を見せた。

近年、文学研究および広い意味での文化研究において、世紀転換期に流行した神秘主義的、心霊主義的な現象（またはそれを反映した文学作品や絵画など）に関心が集まっている。たとえば、心霊写真やエクトプラズム、念写といったオカルト現象への探求や、ヘッケルやベルシェを中心としたなかば宗教的な一元論的世界観といった思想などが、多くの研究者にとって考察の対象となっているのだ。従来、こういったテーマ（とりわけ心霊主義など）は、周辺の事象として、文学研究や歴史研究の大きな流れとは関係ないものと見なされてきたし、ヴィクトル・ユゴーやトーマス・マンのような文豪が心霊現象にも強い関心を示したことなどは、専門的な研究者には知られていたが、そのこと自体を正面から取り上げる研究は少なかった。しかしながら、1900 年前後の文学史上の大きな変化、いわゆるモデルネという現象を探求するうえで、この時代に漂っていた非合理的な思考へのあこがれのようなものは、科学技術の革新とともに、人々の言語感覚や美的感覚を変容させたという意味で無視できないものと考えられるようになってきた。本書でとりあげられたカール・デュ・プレルという人物が、哲学を出発点に、心霊研究から宇宙進化論まで幅広い著述活動を行ったように、世紀転換期における思想や文学および自然科学は、オカルティズムのようなサブカルチャーとも不可分な関係にある。世紀転換期文化における多様性や

重層性、さらには知の大衆への伝播といった問題は、文学や思想のみならず、社会全体の構造の変化にも関係してくる包括的な問いであるということもできよう。

本書は、カール・デュ・プレルについての初めての本格的な評伝である。著者トーマス・カイザーは、専門的知識人よりもむしろ、一般市民が中心的役割を担っていた文化的ムーヴメントとしてのオカルティズムに着目し、その運動の中心的な人物としてのデュ・プレルに焦点をあてている。本書における主要な論点は、デュ・プレルとはどのような人物であったのか、という個人史的側面、ならびにデュ・プレルを中心とした、宇宙進化論、オカルティズム、催眠術などの研究サークルが、どのように形成され、彼らの言説がどのように一般社会に受け入れられていったのか、という文化史的関心の二点にある。

本稿では、カイザーの著書について、内容を具体的に紹介するとともに、日本はもとよりドイツにおいてもほとんど忘却されていたデュ・プレルという思想家が、今日どのような文脈から注目を集めているのか、どのような研究が発表されているのかについても、合わせて言及したい。

1

著者のトーマス・カイザーは、1967 年に生まれ、商船学を学んだ後、リューネブルク大学などで文化学を学んでいる。2000 年に提出した修士論文（この論文も Pytlik 等、デュ・プレルを論じた研究者たちに参照されている）¹ 以来、デュ・プレルの伝記的な研究に取り組み、2006 年に、本書の元になった論文で、リューネブルク大学から博士号を受けている。現在はフリーの文化学研究者として、またハンブルクで芸術プロジェクトを起こすなどの活動もしている。

本書で取り上げられているカール・デュ・プレルという人物についても、簡単に紹介しておこう。デュ・プレルは、1839 年 4 月に、バイエルンのランツフートでブルゴーニュ出身の貴族の家に生まれた。大学に入学し法学を学ぶが、途中で軍に入隊し、少尉まで昇格した。すでに学生時代から、デュ・プレルはショーペンハウアーの哲学に親しみ、1868 年に、夢についての哲学的な研究により、テュービンゲン大学より博士号を授与されている。軍を退役し、学位を取得したデュ・プレルは、在野の思想家・作家として、多くの著書を残した。思想家としてのデュ・プレルは、1870 年ごろから、同世代の哲学者で『無意識の哲学』により時代の寵児となっていたエドゥアルト・フォン・ハルトマン(1842~1906)の知己を得て、無意識や夢といったテーマにつ

¹ Vgl. Pytlik, Priska: *Okkultismus und Moderne. Ein kulturhistorisches Phänomen und seine Bedeutung für die Literatur um 1900*. Paderborn / München / Wien / Zürich 2005.

いて哲学的な探求を試みている。このような試みは、1880年に刊行された『叙情詩の心理学』²へと結実している。

デュ・プレルの著作のなかでも、版を重ね多くの読者を得たのが、1878年の『天空における生存のための戦い』（改訂版は『宇宙の発達史』と名を改め1882年に刊行された）³である。ダーウィンやヘッケルの進化論に影響を受けたデュ・プレルは、宇宙の歴史を、宇宙における生存競争として描き出している。この著作は、同時代の宇宙論・宇宙史ブームの一つの例として考えることができよう。

デュ・プレルの心霊研究者としての代表作としては、大著『神秘哲学』（1885）、⁴ およびレクラム文庫にも収録された『心霊主義』（1893）、⁵ そして今日までペーパーバックとして刊行されてきた『人間の謎』（1892）⁶などを挙げることができよう。⁷ これらの著作では、催眠状態や夢遊状態の人間が見せる行動について、霊媒をもちいた実験から分かったこと、そして人間の無意識的な精神活動と肉体の関係について、さらには死後の人間の生についての洞察などが語られている。

デュ・プレルの哲学的な人間精神への探求というテーマと、宇宙進化論や心霊研究とは、人間の発達可能性という問題意識の上に交差している。デュ・プレルはエルンスト・カップの器官投射説、すなわち人間のつくる道具は、身体の代用、延長として発生し、さらに身体を補強し発展させるものとなるという説⁸を援用し、現代の技術的な発明や発見が、将来的な人間の未来像を指し示していると考えている。⁹ 例えば、心霊的“奇跡”としての空中浮揚現象のなかに、人間の将来における飛行可能性を見いだすといった具合である。デュ・プレルは、心霊主義やオカル

ティズムは、未来の科学において証明されることを、いまだ不確かなもの、証明できないものであるが、過渡的に探求するための科学である、としている。¹⁰

デュ・プレルは1890年代前半まで精力的に活動していたが、1899年に60歳を迎えた後に亡くなっている。

2

次に、各章の内容について具体的に紹介する。第1章および第2章には、本書の特徴的な問題意識が現れている。ここで著者は、19世紀後半における科学知の様相についてまとめ、いかにして知の大衆化（Wissenschaftspopularisierung）が進行していったのかを論じている。カイザーは、Daumの著作¹¹によりながら、ヘッケル、ツェルナー、ルートヴィヒ・ビュヒナーのような分かりやすい著作で最新科学の知を分かりやすく伝えた一連の人物—普及者（Popularisierer）—のひとりに、デュ・プレルも数え入れている。¹² カイザーが着目するのは、大学人ではなく、在野の研究者であったデュ・プレルがどのようにして「普及者」となったのかという戦略上の問題である。後半の伝記的研究において詳しく語られるが、デュ・プレルはおびただしい数の書簡のやり取りによって、ハルトマンをはじめさまざまな分野の知識人との交流を持っていた。この幅広い人脈と、知識人階級の市民に読まれた家庭雑誌（代表的な例として『Gartenlaube』や『Über Land und Meer』など）に近い形態で刊行されていた、『心理研究』のような雑誌や自ら主筆として創刊時から中核をになっていた『スフィンクス』誌のような紙媒体への寄稿だけでなく、講演などの形態も取りながら、デュ・プレルは最新知識としての心霊主義のアピール活動を試みたのである。¹³

第3章では、デュ・プレルの伝記的事実が詳細に描かれている。第1節では、生誕から最初の

² Du Prel, Carl: *Psychologie der Lyrik*. Leipzig 1880.

³ Du Prel: *Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. Leipzig 1882.

⁴ Du Prel: *Philosophie der Mystik*. Leipzig 1885.

⁵ Du Prel: *Der Spiritismus*. Leipzig 1893.

⁶ Du Prel: *Das Rätsel des Menschen*. Leipzig 1892.

⁷ カール・デュ・プレルの用いる Spiritismus という語は、一般的に「心霊主義」と訳されるが、本稿では、場合に応じて「心霊研究」と訳を改めている。Spiritismus という語は、Materialismus（唯物主義）、Spiritualismus（唯心主義）などに対して自己の立場を表明するものとして、用いられているが、デュ・プレルは、それだけでなく、一つの学問分野あるいは一つの学問的方法論として、Spiritismus という語を用いている。それゆえ本稿では、「心霊主義」よりはむしろ「心霊研究」という訳語を優先的に用いた。付け加えれば、デュ・プレルにとっては、ルートヴィヒ・ビュヒナーらに代表される Materialismus は、仮想敵ともいえる存在であり、Materialismus 対 Spiritualismus という二元論的対立を解消しうる一元論哲学として、Spiritismus を位置づけようという意図があったと考えられる。

⁸ Vgl. Kapp, Ernst: *Grundlinien einer Philosophie der Technik*. Braunschweig 1877.

⁹ Du Prel: *Der Spiritismus*. Leipzig 1893, S. 7.

¹⁰ Du Prel: a.a.O., S. 15.

¹¹ Daum, Andreas: *Wissenschaftspopularisierung im 19. Jahrhundert. Bürgerliche Kultur, naturwissenschaftliche Bildung und die deutsche Öffentlichkeit, 1842-1914*. München 2002.

¹² カイザーが参照した著作のなかで、Daum は、エルンスト・ヘッケル、ルートヴィヒ・ビュヒナー、ヤーコブ・モレスコットなどこの時代の大学人から科学系雑誌の執筆者など、百人以上について、どのような経歴を持ち、どのような分野で活動したのかを細かく分類し、代表的な人物として20人を選出している。カイザーは、ここでDaumが挙げた人々と比べてもデュ・プレルは劣らないという。Daum: a.a.O. S.391.

¹³ 巻末の文献表には、デュ・プレルが寄稿した新聞、文芸誌、大衆科学誌など70におよぶ媒体と、投稿された記事のタイトルが列挙されている。Kaiser, Tomas H.: *Zwischen Philosophie und Spiritismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel*. Saarbrücken 2008, S. 214f.

著作を世に問うた時期である 1880 年までを、思想形成期としてまとめ、第 2 節では 1880 年代以降の、心霊研究者として縦横無尽の活躍を見せていた時期について論じられている。カイザーは、とりわけ、デュ・プレルの交友関係に着目している。例えばそれは、青年期からの親友であった、詩人マルティン・グライフ、哲学者としてのキャリアを歩み始めた頃からの助言者であったフォン・ハルトマン、そして雑誌『心理研究』の編集者としてデュ・プレルの協力者であったアレクサンダー・アクサーコフといった人物との具体的な書簡のやり取りの中から浮かび上がってくる。カイザーは、序文のなかで、2000 年以来サンクトペテルブルクから、ヴィーンまでヨーロッパ全土を行き来し 700 通にもものぼる書簡を集めたと述べている。この綿密で実証的な方法から、デュ・プレルの人物像、人間関係、その思想の形成過程がいきいきと見えてくる。

本書の中でもとくに興味深いのが、デュ・プレルの世界観が解明される第 4 章である。デュ・プレルにおける心霊研究とは、人間精神の未知なる領域を探り、そこから将来的な発達の可能性を見いだすということを目的としている。デュ・プレルが心霊現象や催眠術の研究から見いだそうとしたのは、無意識状態の人間において発揮される、通常の人間には感知不可能な感覚の発見であった。デュ・プレルは、死者の魂とトランス状態の霊媒との交信を観察することで、死と生とは空間的に隔てられているのではなく、単に感覚によって、つまり死者の声を捕らえられるか否かという点において分けられているのだと考えた。生きている人間と死者（死者は肉体を持たないがアストラル体という半ば霊的な存在として生き続けるとデュ・プレルはいう）とは、空間を共有しながらも、少なくとも特別な能力を持った人間にしか見えないし、声を聞くことはできない。¹⁴ しかしながら人間が将来的に発達してゆくことで、もしかしたら地上に生きている人間にも、死者の魂と交流することができるようになるかもしれないし、他の惑星に住む人々と言葉を交わすこともできるようになるのではないかと、いうのだ。ここにデュ・プレルの独自の世界観が成立している。

さらにカイザーは他の研究者がほとんど言及することのなかった、デュ・プレルの小説『氷河の十字架』¹⁵ を参照しながら、デュ・プレルが、自らの霊魂不滅説を応用して、唯物主義に毒された社会を変革しようと考えていたことを明らかにしている。事故死した恋人と再会する方法

を模索して、世界を放浪しながら心霊主義の見識を広めていた主人公は、インドで会った錬金術師から、ヨーロッパ文明の自然軽視と物質主義を批判される。デュ・プレルによれば、当時大衆を引きつけた民主主義とは、人々を物質的な豊かさへと向かわせる唯物主義であり、表面的な豊かさや平等思想に惑わされた人々は、最終的に一面的な自然科学的世界観しか持たず、より高次の理想を知ることはないという。デュ・プレルにおける理想、あるいは社会的問題をより良い方向へと向かわせる、心霊主義の思想とは、死後の生存可能性という点にある。現世利益的な狭い思想が、昨今の社会的混乱の源泉にあり、人々が肉体的・物理的な死の後にも生き残り、発展を続けるということを、世に訴えることこそが、心霊主義の使命なのである。このようなデュ・プレルの世界観は、ほとんど宗教の回帰ということができよう。デュ・プレルはけっしてキリスト教的な神の存在に言及しながら、心霊主義を語ろうとはしなかったが、彼の目指した方向性は、明らかに再び宗教へと戻ることだったと結論づけることができる。これは、デュ・プレル同様、自然科学の知に立脚し、一元論哲学を説いたエルンスト・ヘッケルが辿った道とも重なるのではないだろうか。¹⁶

デュ・プレルは、単に宗教的なドグマではなく、また知的エリートのみにはしか理解されない哲学ともことなる、社会全体を視野に入れた思想としての、心霊主義のあり方を模索していたのである。すなわち科学的な裏付けにも配慮しながら、いまだ科学的に証明され得ない領域に足を踏み入れつつ、多くの人々の心を引きつける理念をも持ち合わせていた死後の生存という思想である。カイザーはこのようなデュ・プレルの戦略における、ある種のバランス感覚を指摘している。

デュ・プレルの心霊主義とは、決して非科学的な宗教でも、科学文明から魔術へと逃避した思想でもなく、根底に、近代科学とヴェーバーのいう脱魔術化された世界とが存在するのだと、カイザーはまとめている。

第 5 章および第 6 章、第 7 章では、ふたたび最初の問題に立ち返り、心霊研究ブームの中心として活躍していたデュ・プレルの方法的な特徴についてまとめられている。第 5 章では、著書だけでなく、サークル、講演、雑誌記事など、発表媒体（形態）ごとにデュ・プレルがどのような記事を発表し、どのようにその媒体を利用し、自らのより幅広くなる研究分野をどのように、人々に伝えることができたのかを、論じている。第 7 章では、これまで論じてきたデュ・プレルのメディア戦略や、自ら築き上げてきた哲学的、宇宙論的な心霊主義が、どのように同時代の人々に

¹⁴ Vgl. Du Prel: *Der Tod das Jenseits das Leben im Jenseits*. München 1899.

¹⁵ Du Prel: *Das Kreuz am Ferner*. Stuttgart 1891. この著作がほとんど言及されなかったのは、おそらくあまりにも売れなかったためではないかと考えられる。刊行直後には、いちおう『心理研究』誌のなかで、詳しい紹介記事が掲載されたのだが、カイザーによれば、1891 年から 1895 年までの五年間でわずか 915 部しか売れなかったという。Kaiser: S. 170.

¹⁶ ヘッケルはその著作の中で、自分の思想と同じ一元論 (Monismus) を標榜するデュ・プレルを厳しく批判している。Haeckel, Ernst: *Welträtsel*. Stuttgart 1984, S.388.

受け入れられていったのかが述べられている。デュ・プレルの信奉者たちのグループがいくつか作られていたが、それは単なるオカルトファンの会合だけではなく、彼の詩論に影響を受けた文学サークルという形でも存在していたという。最後に第8章において、カイザーは、この研究では触れなかった、デュ・プレルとモデルネ、またはデュ・プレルと精神分析など20世紀の知との関係については、先行研究を挙げながら、今後の課題としている。

3

カール・デュ・プレルという人物については、これまでほとんど論じられることはなかったし、まともな文学史や哲学史においては、言及されることもまれであった。しかしながら近年、モデルネの内実が文学・芸術上の変革のみならず、都市化・工業化の進展、それへの反発としてのロマン主義的な自然回帰の思想など、さまざまな社会的背景と複雑に絡み合った多様体として考えられるようになってきた。このような流れから、1990年代ごろから、世紀転換期におけるオカルティズムや神秘主義思想とモデルネ、という問題に、関心が集まり、それにことないデュ・プレルという人物の影響力がようやく評価されるようになってきたと考えられる。デュ・プレルの心霊研究について論じている先行研究として、代表的なものを以下で簡単に紹介しておこう。

おおまかに分類すれば、Sawicki、¹⁷ Treitel、¹⁸ Linse¹⁹ らは、歴史的な事象として世紀転換期オカルティズムの流行を描き出そうと試みている。すなわち、中世以来の神秘主義思想との連続性、あるいは19世紀後半、帝国主義と科学技術の時代における文化・芸術を巡る状況の変化との関連、といった観点である。それに対して、Fick²⁰ およびカイザーの師にあたる Clausberg、²¹ そして Pytlik²² らは、文学や哲学の歴史とも関連づけ、デュ・プレルの思想が、モデルネの思想・文学上の運動とどのように接点を持っていたのかを明らかにしようとしている。たとえば

¹⁷ Sawicki, Diethard: *Leben mit den Toten. Geisterglauben und die Entstehung des Spiritismus in Deutschland 1770-1900*. Paderborn (u.a.) 2002.

¹⁸ Treitel, Corinna: *A Science for the Soul. Occultism and the Genesis of the German Modern*. Baltimore / London, 2004.

¹⁹ Linse, Ulrich: *Der Spiritismus in Deutschland um 1900*. In: Baßler, Moritz / Châtellie, Hildegard (Hg.). *Mystik, Mystizismus und Moderne in Deutschland um 1900*. Strassburg 1998.

²⁰ Fick, Monika: *Sinnenwelt und Weltseele. Der psychophysische Monismus in der Literatur der Jahrhundertwende*. Tübingen 1993.

²¹ Clausberg, Karl: *Zwischen Hexensabbath und Psychoanalyse: Goyas 'sueño de la razón' und Carl du Prels 'dramatische Spaltung des ich im Traume'*. in: Städeljahrbuch Neue Folge, Bd. 18. München 2001, S. 213-250.

²² Pytlik: *Okkultismus und Moderne*.

Pytlik の著作は、デュ・プレルを中心としたドイツの心霊主義者たちの言説が、具体的にデーメル、リルケ、トーマス・マンらの文学作品におよぼした影響について解明している。またデュ・プレルを中心にしているわけではないが、Hagen²³ は、ダニエル・パウル・シュレーバーの『ある神経病者の回想録』(1903)の背景として、デュ・プレルをはじめとする世紀転換期の科学的オカルティズムの影響に着目し、デュ・プレルの無意識への探求と、ソシュール、ラカンらの現代の言語思想とを比較している。

これらの先行研究と比較すると、カイザーの立場はよりはっきりしてくる。カイザーがデュ・プレル研究の目的として掲げていたのは、すでに述べたように、ひとつにはデュ・プレルの個人史を追い、忘れられた思想家の実像を描き出すことであった。そしてふたつめに、哲学・自然科学や科学技術についての知が一般に普及していった時代に、オカルティズムがどのように多くの読者・信奉者を得るに至ったのか、という問題である。これらの問題意識について、カイザーは数多くの新聞・雑誌記事や公文書等の記録に目を通し、それぞれの論考がいつ、どの媒体に発表されたのかをつぶさに調べ上げ、膨大な数の私信から、デュ・プレルの人生と彼に関わった人々の発言とをいきいきと描き出すことに成功している。もう一つ、カイザーが力説しているのは、デュ・プレルが、多くの文学者や雑誌編集者らとの付き合いのなかで、心霊主義を広めるためのネットワーク形成を行ったことの意義である。それは本書に事細かに述べられているように、もちろん部分的にしか成功しなかったが、在野の研究者であったデュ・プレルが、大学人や出版人など多様な人々の間で、それぞれの研究分野や活動領域を超えたネットワークを構築し得たことの重要性を認めている。第1章および第2章においてカイザーが、知の大衆化あるいはポピュラーサイエンスの広がりという問題について、多くのページを割いていたことは、このような問題意識の現れといえる。

カイザーは第4章において、デュ・プレルの心霊研究から見えてくる、彼の思想や世界観について言及したが、デュ・プレルの思想的な深みや他の思想家との関係や、現代的な問題とのつながりについては、あまり多くを語ろうとはしない。それはおそらく、ごく短い期間でこの大部の研究論文をまとめたという時間的な制約にも起因するのであろうが、あるいは今後取り組むべき課題として念頭に置いているのかもしれない。

²³ Hagen, Wolfgang: *Radio Schreber. Der »moderne Spiritismus« und die Sprache der Medien*. Weimar 2001.

おわりに

デュ・プレルは、本書にも付録として収録されている「何を読むべきか？」(1895)というインタビュー記事の中で、40冊近くに及ぶ詳細な文献リストを挙げている。²⁴ このリストをみると、彼がどのような知識を背景に、心霊研究に取り組んできたのか、そして彼の心霊研究から、どのような広がりが見られるのか、ということが見えてくる。デュ・プレルが文献リストの筆頭に挙げているのは、もちろん彼の思索の出発点にあったカントの『視霊者の夢』とショーペンハウアーの哲学である。それに続くのが、フィヒテの人類学やフェヒナーの精神物理学などである。そして当然のことながら、メスマーやピュイゼギュール、ドゥルーズなどの、19世紀初頭に流行した動物磁気論の著作も挙げられている。また、クルックスやウォーレス、リエボーのような英仏の心霊研究者の著作も含まれている。興味深いのは伝統的な神秘主義や動物磁気論の知識だけでなく、ベーアの進化論やエベルティの宇宙論など、自然科学の著作も含まれている点である。この文献リストは、デュ・プレルが読者たちに、みずからの心霊研究を知るための参考図書を示しているともいえる。すなわちこれらの文献リストから見えてくるものこそが、彼の著作と同様、彼の心霊研究なのである。デュ・プレルの心霊研究とは、哲学でもあり心理学でもあり神秘主義や動物磁気論でもあり、そして宇宙論でもある。とらえどころがない知の複合性こそが、デュ・プレルの思想の核心であり、可能性ともいえるのではないだろうか。

デュ・プレルの構想した心霊主義的世界観は、すでにみたように、たしかに伝統的なオカルティズムやエゾテリズムの系譜に連なる部分も多いし、霊魂の生存可能性という問題もとくに目新しいものではない。しかしながら、デュ・プレルの思想は、ダーウィンやヘッケルの進化論、最新の宇宙論などの自然科学や、催眠術や夢解釈、さらにはエックス線や写真などの技術を取り入れながら、宗教的世界観や宗教による救済が求心力を持たなくなった時代において、一人の人間にどのような可能性があるのかを探った試みとして、今日の私たちにとっても意義を持つものではないかと考えられる。私たちはデュ・プレルの残した論考や、彼の影響を受けた多くの人々の言説から、およそ100年前に生きていた人々が、どのように人間の能力やその発達可能性を想像していたのか、そしてどのように宇宙や世界を捉えようとしていたのかを知ることができる。

本書では、デュ・プレルの思想の核心的な部分や、後の時代の思想との関係（たとえばフロイトの精神分析などとの類縁性など）については、予見的に示されているにすぎない。しかしなが

ら、今後の研究を続けていくものために、豊富で正確な資料を提供しているという点で、非常に高く評価することができよう。

(VDM, Saarbrücken, 2008)

²⁴ Kaiser: S. 207.